



同窓会だより

同窓会よりのご挨拶

新潟大学歯学部同窓会 会長 多和田 孝 雄



昨年4月に新執行部を立ち上げて1年が経過しましたが、有能な役員に恵まれて実に様々な出来事があつた昨年を乗り越えて参りました。ふと振り返ると無事根付くかと心配された歯学部駐車場の桜は既に移植されており、今年の総会に合わせるかのように見事な花を咲かせてくれました。

同窓会にとって昨年度の最も大きな出来事は不幸なことに新潟県の水害と地震ということになってしまいます。特に昨年10月23日に発生した中越地震においては、我々の同窓会からも50数名という多くの会員が何らかの被害を受けました。同窓会では地震の規模が明らかになった発生3日後に義援金募集を決定し、全国の会員の皆様に協力をお願いを要請しました。地震の大きさは既に新聞やテレビ等で報道されており、同窓会からの要請を待ちかねていたかの如く、全国500名以上の会員から500数十万円の義援金が寄せられました。執行部においては福利厚生理事を中心に慎重に分配金が決定され、無事被災会員の下へ届けることが出来ました。後日いただいた被災会員からの礼状を拝見致しますと義援金も然る事ながら全国の仲間から受け取った精神的支援はより大きな励みになったと思われまふ。誠にありがとうございました。

「会員一人ひとりを大事にすることにより、会

員からも大切にされる同窓会づくり」、「会員にメリットのある同窓会づくり」、「強い同窓会づくり」を三本柱として、この1年間同窓会を運営してまいりました。分かりやすい目標を掲げることにより、役員には仕事がやりやすく、会員には開かれた同窓会作りを目指しておりますが、既に初年度から好結果が表れております。昨年度開催の各種イベントの成功、会費納入率のV字回復等今後の明るさが期待できる内容になっております。また、会員数が2,000名に近づくことによって、各種のスケールメリットも出始めており、会員サービスの充実や歯学部との連携の拡大も今後の同窓会ビジョンに組み入れることになると思われまふ。

既にご報告致しましたが、昨年4月に法人化した新潟大学の支援を設立目的の一つとして、同時に全学同窓会連絡協議会が設立されました。そして、来年4月に同会は全学同窓会に移行する予定です。歯学部同窓会からは私と佐藤定雄副会長、鈴木一郎副会長、福島正義理事が参加しており、現在は全学同窓会設立に向けての組織の確立や会則等の準備が進められております。組織構成も歴史も異なる各学部同窓会の連合体の立ち上げであり、それぞれの感じる違和感を少しずつ克服しながらの作業となっておりますが、各学部同窓会の英知を集めた会議が頻繁に開催されており、来年4月には間違いなく全学同窓会が誕生することになります。私は歯学部なくして同窓会はなく、新潟大学なくして新潟大学歯学部はないと認識しております。全学の場に積極的に役員を派遣し、活躍してもらうことによって、ささやかながらも歯学部支援になれば幸いです。



気候も中身も穏やかだった 平成17年度同窓会総会

副会長 赤坂 長 右

日時：平成17年4月16日(土) 午後4時30分～
場所：歯学部2階大会議室

木蓮の真っ白な花やレンギョウの黄色い可憐な花が青空に鮮やかに映えて…「新潟が一番いい季節」を迎えました。そして桜前線がまさに新潟の地に差しかかった4月16日、平成17年度同窓会総会が開催されました。

これまでは総会后に学術講演会が控えていることで十分な時間が確保できていませんでしたが、今回は余裕を持って協議できるようにと順番を入れ替え、夕刻からの開始となりました。

冒頭、多和田会長は挨拶の中で、就任時に掲げた以下の3つのスローガンを引き、就任してからの一年間をこう振り返りました。

- ①会員一人一人を大切にすることで、会員からも大切にされる同窓会作り
 - ②会員にメリットのある同窓会作り
 - ③強い同窓会作り
- ～会長挨拶から～

まず、16年度は風水害や地震などの天災が度重なり、被災した同窓生の安否確認や見舞いなどの対応に追われた1年だった。すでにご案内のように同窓会の呼びかけによって多くの方から義援金が寄せられ分配できたことは、お互いが仲間を大切にしようという気持ちの表れと理解でき、「大切に…」はある程度証明されたのではないかと自負している。次に会員にメリットを感じてもらうことは大変に難しいことで、十分になし得なかったと思っている。会費未納者の意見もキャッチできるような工夫をするなどして、会員のメリットを構築していきたい。最後に、様々な実績により大学内での発言力が増し大学との協力関係も強固になりつつある。同窓生が増えてきたことによるスケールメリットも出てきて、財務体質も徐々に改

善している。今後も会員の皆様の絶大な協力を得て、同窓会の発展に寄与していきたい。

つづいて鈴木総務理事の議長の下で議事が粛々と進行しました。議事の詳細は議事録にゆずり、ここではその雰囲気をお伝えします。事前配布された議案書には、この一年間の事業執行実績が細大漏らさず記載されておりましたが、成田専務理事の要点のみの報告だけでもかなりの時間を要し、同窓会事業が多岐にわたって充実してきていると実感させるものでした。

一般会計をはじめとする16年度の各種決算および17年度事業計画が滞りなく承認され、いよいよ17年度予算案の審議です。名簿や会報の発行に伴う支払い執行が年度を跨いだことによる決算書や予算書の不備を指摘され、今後の改善を求められる場面もありましたが、理事会、評議会で綿密に諮られていたこともあり、さしたる質問もなくすんなりのご承認をいただきました。

また、17年度に一般会計から500万円が同窓会室準備積立金に繰り入れられることについてもご承認をいただきました。これまで同窓会室スペースの学内確保という可能性もわずかに残していたかに見えましたが、学部との定期協議会の場で山田学部長から不可能との回答がありました。これを受けて今後は何らかの形で同窓会室を学外に求めざるを得ない旨の会長の補足説明は出席者を納得させるものでした。

最後に、福利厚生部門が鋭意検討し、理事会や評議会の議を経てバージョンアップした「天災等被災に関する見舞規約（暫定）」と「慶弔規約（暫定）」が無事にご承認をいただき、今後一年間をかけて正式成立を図る旨の執行部説明がありました。

ところで話は変わりますが、国道116号線の拡幅工事のために移植を余儀なくされ、歯学部病院敷地から姿を消していたあの桜の大木はどうなったのでしょうか。ありました。ありました。総会終了後、連れ立って学校町の懇親会場へと向かうと、学校町通りに面した敷地すれすれに、1本、2本…4本の桜の木が整然と並んでいるではありません



んか。それも今を盛りと満開の花を混えて。全国の皆さん、本同窓会総会は毎年、こんな「新潟が一番いい季節」に開催されています。来年の総会こそ、新潟の春を満喫しにおいでくださいね。

平成17年度 新潟大学歯学部 同窓会・総会学術講演 「象牙質・歯髄複合体研究の進展と再生医療への 生物学的基盤」大島勇人教授の講演を拝聴して

19期 佐藤 拓一^{(*)1}

4月16日の土曜の昼下がり、歯学部講堂に、新進気鋭の大島勇人教授（43歳！）を迎えて、同窓会・総会学術講演が開催されました。

大島先生は、1981年新潟大学歯学部入学、87年に卒業（17期生）、口腔解剖学第2講座の大学院生となり、91年歯学博士。その後、2期生の長谷川先生の歯科医院勤務、口腔解剖学第2講座の助手／講師／助教授を経て、2002年に硬組織形態学分野の教授になり現在に至っております。

大島先生の研究領域は、「象牙質・歯髄複合体の発生と再生」「歯髄の免疫防御機構」「歯の幹細胞の探索」と幅広く、その研究の activity の高さは、15年前に論文発表を開始してから、ISI データベースに登録されている英文論文^{(*)2}として35編を発表し、Nature Genetics 2000年（被引用回数175回）を始めとして、J Comp Neurol 1995年（30回）、Arch Histol Cytol 1990年（22回、学位論文）、Connect Tissue Res 1995年（21回）、Arch Histol Cytol 1994年（20回）など、いわゆるヒット論文を連発していることから窺えます。

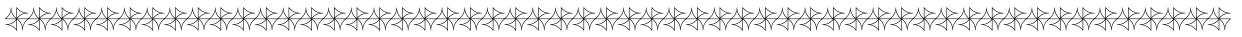
今回は、先生の学位論文以来の研究テーマであります、歯髄に関する最新の知見についてご講演いただきました。象牙質を切削した際に、歯髄で起こる反応という臨床的に極めて重要なトピックスをイントロダクションとして、歯髄には優れた「歯の修復能力」が備わっていること、また、歯髄は通常、何故、石灰化しないのか？ という命

題を掲げ、歯髄の石灰化能力、さらには再植や半導体レーザー照射後に起こる歯髄腔狭窄現象について解説されました。講演は、さらに「歯髄の再生」と背中合わせの関係にある「歯髄の発生」について話が進展し、歯髄細胞の由来や歯胚形成のメカニズムといった象牙質・歯髄複合体（Dentin/Pulp Complex）研究の最前線について、教室の多くの大学院生の研究成果を交えて紹介されました。また、独自に開発・確立した窩洞形成実験システム、ならびに、歯の再植・移植などの動物実験モデルがビデオ映像で紹介され（講演の数日前に、撮影されたばかりだったそうです）、ラット臼歯部に鮮やかに窩洞が形成されたり、歯の再植が施されたりする様子が放映され、聴衆を魅了しました。また、「歯の identity は象牙芽細胞が決めている！」と象牙質・歯髄複合体研究の面白さについて、熱く語られました。講演会の終盤には聴衆との活発な質疑応答が展開され、この種の講演としては異例ともいふべき熱気を帯びた雰囲気となり、聴衆の関心の高さを裏付けていました。

なお、講演要旨は同窓会のホームページ^{(*)3}に掲載されており、大島先生による総説も数多く出版されています^{(*)4}ので、詳細についてはそちらをご覧ください。

- *1. 所属：東北大学大学院歯学研究科
(tak@mail.tains.tohoku.ac.jp)
- *2. ISI: Institute for Scientific Information.
- *3. <http://www.dent.niigata-u.ac.jp/alumni/index.html>
- *4. Clinical Calcium 2003年、新潟歯学会誌 2004年、日本歯科評論 2004年、ミクロスコーピア 2004年、日本歯内療法学会雑誌 2005年





平成17年度新潟大学歯学部 同窓会総会学術講演

「象牙質・歯髄複合体研究の進展と再生医療への
生物学的基礎」大島勇人教授の講演を聞いて

14期 鮎川幸雄

平成17年4月16日の新潟大学歯学部同窓会総会学術講演では、本学顎顔面再建学講座硬組織形態学分野の大島勇人教授による「象牙質・歯髄複合体研究の進展と再生医療への生物学的基礎」という演題で講演いただきました。私は歯学分野(旧1保存)在職中は歯髄の保存を研究テーマとしておりましたので非常に興味ある内容の講演でありました。大学を去って5年経ちますが歯髄へのこだわりはいまだに続いており、日常臨床では見ることのできない組織である歯髄を想像しながら治療することしかできない開業医にとってはまさに一筋の光でありました。講演の中で特に印象に残ったことは、最近の歯髄生物学の分野では、歯髄には少なくとも二つの異なる由来を持つ細胞が存在し、それは従来から広く受けいられている神経堤由来細胞(外胚葉性間葉)に加え、元々歯胚形成部位に存在していた中胚葉性細胞の存在が考えられるそうです。それゆえ歯髄は象牙質細胞に分化する能力のある神経堤由来細胞と骨形成能をもつ中胚葉性細胞のハイブリッドな組織であるといえるそうです。以前大学在職中歯髄の切片を見ていると骨様象牙質が見えたり、細管構造を有する象牙質だったりでどのように理解したよいか分からなかったことを思い出し、ちっぽけな歯髄の中には我々の想像をはるかに超えるドラマがあるんだなと考えさせられました。

近年の歯の発生生物学的研究の進展に支えられた象牙質・歯髄複合体に関する知見は飛躍的に増大しており、また免疫機序と臨床との関係についても近年明らかにされつつあります。とりわけ新潟大学歯学部では世界でも最先端の研究成果が得られていることは同窓生として嬉しい限りであります。講演会後の懇親会では大島先生の研究に対

する情熱に触れることができ、きっと臨床上の疑問に答えられる研究成果が続々と出てくることを確信致しました。

私は歯髄の研究をちよつとかじっただけで偉そうなことは言えませんが、組織切片作成していたとき、デンチンブリッジ部位や修復象牙質部位は周囲から剥がれやすく切片作成時非常に苦労した思い出があります。また連続切片で見るとこういった組織は決して均一ではなく所々連続性を欠く場合もあり、炎症歯髄の場合はその傾向があるのかなと想像をしておりました。ならばということで歯髄腔が狭窄し根管口がわかりにくいとき超音波スケーラーで根管を明示すれば意外と構造の弱いところを破壊して明示できるのではないかと考えております。まあ単なる一開業医の私見ではありますが、そんなことも思い出してしまった価値ある講演でありました。大島先生どうもありがとうございました。

歯学部同窓会支部長会議報告

同窓会副会長 宮野正美

日時：平成17年7月2日(土) 午後5時～7時
場所：新潟市 ホテルイタリヤ軒5F「弥彦」
出席者：

大学 山田好秋歯学部長、宮崎秀夫医歯学総合病院副病院長、魚島勝美医歯学総合病院
歯科総合診療部教授

支部 永木修二(茨城)、鈴木廣(群馬)、早川裕(神奈川)、長峯岳司(福島)、伊藤敦信(山形)、山下智(新潟)、山上伸一(石川)

本部 多和田孝雄(会長)、野村修一(副会長)、佐藤定雄(副会長)、赤坂長右(副会長)、鈴木一郎(副会長)、宮野正美(副会長)、成田秀(専務理事)、鈴木政弘(総務理事)、田口洋(広報理事)、新美奏恵(広報理事)

内容：

標記支部長会議が、前回開催から3年振りに新潟市にて開催されました。多和田執行部が発足し





て1年余が経過し、会長の3大方針「会員一人ひとりを大事にする事により、会員からも大切にされる同窓会作り」、「会員にメリットのある同窓会作り」、「強い同窓会作り」のもとに同窓会事業を執行してまいりました。各支部との連携強化を図り、直接ご意見をお聞きして今後の事業運営に反映するため、また歯学部においては18年度より実施されます「歯科医師臨床研修必修化」において協力型臨床研修施設として同窓生各位にご協力いただきたく今回のタイミングで開催の運びとなりました。会議冒頭、多和田会長は昨年の義援金募集に際しての謝辞を述べられ、「被災会員にとって金銭的のみならず精神的に大きな支えになったこと、大学の独立行政法人化に伴い大学を支援すべく全学同窓会発足に向け準備が進んでいること、歯学部と当同窓会は現在極めて良好な関係にあること」旨挨拶がありました。続いて協議Iとして本会事業、協議IIとして歯科医師臨床研修必修化についての協議に移りました。

協議Iでは(1)各種規約改正(本会会則、天災等被災に関する見舞規約、慶弔規約、都府県代表幹事設置)、(2)同窓会館(室)について、(3)遠隔地会員への同窓会サービスについて、(4)代診医相談窓口について、の説明がありました。その中で特に「全国の会員に平等に見舞事業、慶弔事業を行なうので、そのためには情報収集の全国ネットワークを充実させることが重要であり、是非協力頂きたい」(佐藤副会長)との強い要請がありました。支部からは「若手会員、勤務医の把握が難しい」(茨城、山形、福島)との報告がありました。

協議IIに先立ち、山田学部長より歯学部の現況説明として「口腔生命福祉学科設立に伴い、介護

の現場で活躍できる歯科医師、歯科衛生士の養成を行なう、国際交流コースの大学院設置、デンタルスクール構想」のお話がありました。宮崎副病院長より「外来来院数、病床稼働率共11国立大学中上位につけている、高度先進医療(4件)、特色ある外来で社会に貢献すると同時に優秀な歯科医師を輩出するために卒前・卒後教育も重要な位置付けである」というご説明がありました。

協議IIでは魚島教授より18年度からの歯科医師臨床研修必修化について詳細な説明を頂きました。その中で、協力型研修施設としてのメリット(厚労省認定研修施設となることの社会的ステータス、新卒者採用時の選択等)を挙げられ、協力型施設の確保、特に関東、新潟近県において同窓会各支部の協力が不可欠であることを強調されました。質疑応答の中で、協力型施設において研修医給与格差の問題、研修内容格差の問題等今後検討していくとのお答えがありました。

最後に、野村副会長より「同窓会事業、臨床研修事業共に各支部会員各位の協力なくしては成り立たないものなので是非ご理解、ご協力を頂きたい」との閉会の挨拶で会議を終了いたしました。その後の懇親会では、梶川幸良元会長、神田正一前会長にもご出席いただき、和やかな雰囲気の中、意見交換が行なわれ散会となりました。

このたびの支部長会議開催にあたり、参加支部が少なく(全17支部中参加7支部)また協議時間が不足しましたことを反省点とし、次回開催時には改善いたしたいと思っております。

ご参加いただきました山田学部長、宮崎副病院長、魚島教授、支部長各位には大変ありがとうございました。





義援金のお礼

新潟大学歯学部同窓会 監事 神 保 陸 郎

このたびの新潟中越地震、及び平成16年夏・秋、の風水害にさいして510名もの大勢の同窓生の方々が大変心配してくださり同窓会に義援金を寄せて頂きまして誠に有難うございました。

今回被災した同窓生は多数にのぼり、またその被害の程度はさまざまありますが、大怪我をされた方がおいででないのは不幸中の幸いでした。

私は同窓会の監事であり、また長岡市に住いしており新潟県中越地震で一部損壊の罹災認定を受けた1人ではありますが同窓生の皆様のご好意と執行部及び、関係方々のお取り計らいに感謝いたします。

10月23日当日、たまたま宇都宮にいましたが宇都宮市内のビルも結構揺れました。しかもゆつくりとした長い揺れで、それがたて続けに3回も起こりましたから、どこか遠方で大きな地震ではと感じましたが、まさか自分の住む新潟県中越地方が震源地だとは二ニュースを聞くまで思ってもいない事でした。

電話がさっぱり通じず何度も掛けなおしたりしているうち新潟市にいる長女から携帯が鳴り「長岡の自宅は家の中がメチャメチャ、母さんは怪我してないけど父さん早く帰ってやって欲しい…」との事。

早々に予定を中止し、惨状を刻々伝えるカーラジオを聴きながら道中あれこれ思いを巡らし、水と当面の食料を買い込んで、急遽東北道経由で帰岡。長岡に近付くにつれ停電で市内は死んだような暗闇、橋が落ちてたり、家や塀が倒れて道路をふさいでたり、余震の恐怖で路上に人々が呆然と佇んでおったり、所々交通止めになって街の灯りも無く信号機も消えた深夜、真っ暗で通ったこともない細い道をぼんやり出ている月を頼りに拙宅をめざしました。

たびたび襲ってくる余震は凄まじく危険で家に入っておられません。

親子仲良く3日3晩車の中で語らいながらホームレスをしました。

「地震も怖いけど空襲はもっと怖かったね…」84才の老母の言葉。

「普段何とも思っていない電気と、ふんだんに使える水道やガスそして小さくとも夜露を凌げる屋根があれば人生は充分だね。」

おかげさまで拙宅、診療所とも被害は近隣の家々より比較的軽くすみ、外壁や壁、タイルの一部落下、家具類の転倒くらいで職人さんの手のすいた来年あたりに補修でもと思っています。

今回の災害は対象被災者が多数であり、寄せていただいた貴重な義援金の配分について執行部、福利厚生委員、理事会、評議会等でそれぞれ何回も何回も慎重に協議され履行されました。

そのご苦勞にも感謝いたします。

そして監事として、このたびの災害を教訓にし同窓生の絆をより確かなものとなるよう各規約、諸規則を検討、審議に役立ててまいりたいとおもいます。

今後とも同窓生の皆様の御協力、ご支援を賜りますようお願い申し上げます。

大変ありがとうございました。

平成16年度 第2回 歯学部 教授会・同窓会定期協議会開催

渉外担当理事 飯 田 明 彦 (18期)

標記会議の議事要旨を以下に記します。

出席者：山田学部長、宮崎副病院長、魚島総合診療部教授、多和田同窓会長、赤坂副会長、宮野副会長、佐藤副会長、鈴木副会長、成田専務理事、飯田渉外担当理事

日 時：平成17年2月16日(水)

午後7時～8時40分

場 所：新潟大学歯学部学部長室



協 議

1. 歯学祭の日程調整について

全学同窓会の運営委員会で、新大祭、歯学祭、医学祭の日程が不ぞろいで、大学と全学同窓会共催の交流会等の日程が決めにくいと意見が出された。これを受け、同窓会側から大学側に対し、歯学祭の日程を変更できるか否かについて問い合わせを行った。山田学部長から、歯学祭等を含めたカリキュラムは、前年度に決定するので、歯学祭の日程を変更するには早めに日程調整を行う必要があるという回答が得られた。

2. 同窓会室について

同窓会側から現在の同窓会室が狭隘化してきており、歯学部内に他の場所を確保できないかという相談を行った。山田学部長からはPBL (Problem Based Learning)など、少人数制の教育システムを導入しており、そのために各科の実習準備室等を引き上げ、改装しているような状況なので、場所の確保は難しいとの回答であった。同窓会側としては、今後大学以外にも場所を探していくが、それまでの間はもとより、同窓会の窓口を大学内に置いておくという観点からも現在の場所をしばらく継続して使用させていただきたいとの申し入れを行った。

3. 臨床研修医制度について

臨床研修医制度について魚島総合診療部教授から説明があった。それによると、2月12日、13日に行われた臨床研修指導医の研修会に学外からも12名の参加があった。今後、協力型研修施設を増やすよう同窓会・県歯科医師会を通じたアプローチをしていく。日本歯科大学新潟歯学部でも協力型研修施設を開拓中であるが、お互いに施設を取り合うような状況は避け、協力体制を取り合っていくことで合意が得られている。いずれにしても、大学側としては協力型研修施設を増やすことが急務で、それには、同窓会の協力が不可欠である。これに対し、同窓会側としては、複数人数で診療している協力型研修施設に適合する医療機関の検索、協力型研修施設に関する案内状を会員に配布する、後援会を通じた協力型研修施設の発掘など

の面で協力を行うことになり、早速、次回と同窓会誌発送の際に、大学側が作製した案内状を同封することとなった。なお、臨床研修医制度に関しては現状では未定な部分が多く、新しい情報を加えた案内状を複数回送付していく方針となった。

4. 歯科技工士学校の閉校式について

山田学部長より3月10日の午前10時から歯科技工士学校の閉校式が行われるので、同窓会側からも出席をお願いしたいとの申し出があった。この点に関しては、多和田会長が出席することになった。

5. 入学試験の出願状況等について

歯学科、口腔生命福祉学科ともに高倍率であることが紹介された。また、口腔生命福祉学科の教授に本学卒業の小野和宏先生(現顎顔面口腔外科学分野、16期)が就任することが報告された。

以上

「歯学部6年生と同窓会との交流会」開催される

渉外担当理事 飯 田 明 彦 (18期)

毎年7月に「6年生に進路をアドバイスする会」を開催していましたが、来年から臨床研修が必修化となるため、学生が進路にこれまでのような多様性がなくなるため会のあり方を渉外担当役員で検討しました。その結果、

1. 長期的にみれば、同じようなアドバイスは必要かつ有用なものであるが、そのやり方、対象(学生 and/or 研修医)や時期については、研修医制度そのものが現時点では不透明なところが多く、次年度以降検討する。
2. 進路アドバイスは別として、同窓会が学生と懇親を深め、同窓生としての意識を共有する機会は持ち続けたい。

という結論に達し、本年度は「歯学部6年生と同窓会との交流会」という名称に変えて例年までと同様のビアパーティーを開催することとしました。



人員の都合によりいつもの金曜日ではなく、7月20日(水曜日)に歯学部大会議室で開催しました。

同窓会側からは多和田会長、宮野副会長、鈴木副会長、成田専務理事を始め、学内理事らが参加し、学生は、例年に比べると少ないものの約25名の参加を得ました。

例年、野内理事から行われる、同窓生の就職動向、同窓生の全国分布、新潟県・市における歯科医師数調査結果などの報告は、野内理事が欠席であったためその資料を用い鈴木副会長からなされ、その後多和田会長のあいさつ、宮野副会長による乾杯へと移っていきました。

学生にとっては、来年どこで研修を行いたいという希望を出す前の時期で、1年の研修期間が終了したあとにどのような進路が待っているのかもわからない状態で、同窓会側の話は少し遠いものとして写ったようです。しかし、アルコールが入ると同窓会側と学生が少しずつうちとけはじめ、なごやかな雰囲気でも進んでいきました。今後は、「進路をアドバイスする会」のあり方を検討していく必要があるかとも思いますが、いずれにしても普段あまり接することのない同窓会と、卒業を間近に控え近々同窓会に入会する学生との親睦会は有意義なものといえ、何らかの形でこのような会を継続していくべきと思いました。

